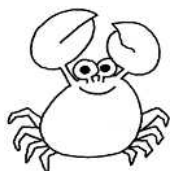


女性部委員の山崎容子さんは、25年余り住んでいた公団住宅から退去命令が出ました。しかし、そのたたかいにたった一軒家族で挑みました。そのたたかいを綴った文面や短歌をご紹介します。

**速達便こころ鎮めて封切れば 退去通告のワープロの文字
感情の破片(かけら)散らしつつ 相手方(オーナー)へ携帯かけいる休憩時間**

1、2階はスーパー、3階から5階までが51戸の公団住宅。JRにも京成線にも近い市街地に、25年余り住んで、ここを終の棲家と決め、年金では足りない分を夫婦で働いて生計を立てている。平成19年6月、何の予告もなく退去通告が舞い込んできた。51戸の内、わが家を含めて4戸だけが、区分所有者(土地のオーナー、建物は公団)との契約になっているので、退去条件は公団契約者とはかなり異なっていた。姉歯事件以来の耐震不足を正当事由に「立退き料はゼロ、現状回復免除と敷金の返還のみです。あらかじめご了承下さい」という内容の代理人弁護士からの速達便であった。何度読み返してもいかりで震えがとまらなかった。個人では知恵も知識も法律に関しても無力に等しいので、まず地域の共産党の市議さんに相談し、借地借家協会、党の無料法律相談へとつながった。その結果、簡易裁判所に調停の申し立てをすることになった。その間に貴重な資料、情報を入手することが出来た。

公団住宅(現独立行政法人都市再生機構)の累積赤字(放漫経営)の解消の資源として、整理、合理化計画が閣議決定され、その路線上の第一号の対象となったのが、私の住んでいるI市の公団であるというのだった。そして、第二、第三と全国的な物件が対象になることが明記されていた。この問題は共産党として取り組んでいることが解った。個人の問題だけではなく、公団住宅という国の政策転換という重要な案件につながる意味をもっていた。一方的で理不尽な通告に対して、調停の場でどれだけのたたかえるか不安だった。



**言い尽くすことができずして調停室出づれば 淡々と春のオリオン
冬すみれ濃く凜と咲く 最後の調停へ向う朝の舗道に**

中立の立場であるはずの調停委員が「山崎さん一軒だけが居残って要求をしても、客観的、常識的に考えても無理です。相手方は裁判をおこすと言っています。」と言われると、今までの信念がぐらついてしまう。「わが家にとっては死活問題なのです」と訴える。平成20年4月から始まった調停も7回目を迎えていた。裁判への長期戦という切迫した時期にさしかかっていた時、自由法曹団の団地問題に詳しい弁護士さんにつながりができた。「ここまで一軒でよく頑張ってきましたね。相手方が裁判をおこしても恐れることはありません。居住権は保障されなければならないし、この退去条件は弱

者いじめです。あなたの後に続く人達への指針にもなります。山崎さんが腹をすえて頑張るなら、私も最後まで一緒にやります。」「裁判費用と時間が心配です。」「お金のことを心配していたらたかいはできません。お金のことは考えなくていいです。最初の一回目は出廷しなければなりません。後は私ひとりでもいいのですから仕事に支障はきたしません。重要なことは個人の事情と党の功績を秤にかけたら、山崎さんの事情を第一に考えるべきです。」「迷っている私へのありがたい助言を下さった。夫、息子と何度も話し合い、たとえどんな状況になろうとも弁護士さんと今まで支援して下さいた人たちと一緒にあきらめないでたたかっていこうと心に決めたのだった。八回目の調停日は12月も押し迫っていた。「今まで通りの要求を変えるつもりはありません」不安と焦りと疲労の積み重なった私だったが、今回は冷静だった。すると急転直下、相手方が合意の意志を示したのだ。最後に裁判官が同席して、合意案書を交わした。予想もしなかった終幕だった。

私の体験が全国の同じ立場に立っている人たちに、なんらかの役に立つことを思うと、調停の一コマ一コマの記録の整理を急がねばと思う。まだ引越して間もない、荷物の狭間に原稿用紙と鉛筆を探しながら・・・。

銭湯の煙ひとすじ鳩羽色 終の棲家の小さき窓より
(深川分会 山崎 容子)



女たちの戦争と
平和資料館
4月25日(土)

早稲田アクティブミュージアムを訪れて
東京女性部副部長 近澤美樹

WAMを訪問するのは2度目です。前回は昨年の中央女性部大会後に全国のみなさんと訪問しました。「戦争を知らない」私はこれまで、ヒロシマ・ナガサキ、東京大空襲、地上戦の沖縄等その地に足を運び、またその経験をされた方からお話を聞く機会を得て、その惨状を学び、戦争は人間が狂気の沙汰の限りを尽くすおぞましい行為であること、その行為を憎み、あらゆる暴力と戦争をなくすことへの思いを重ねてきたつもりでした。

ところが、「慰安婦」問題、無辜(むこ)の数知れない女性たちが生きながら「辱めを受けた」、このむごすぎる事実に正面からむかう勇気をなかなか持つことができませんでした。

WAMの入口には女性たちのポートレートが飾られています。大きな勇気をもって被害者であることを名乗り出た女性たちの写真です。

このひとり一人の女性たちにしっかりと向き合うことからこの場所での学習は始まります。

誰もが私たちと同じ、自分の人生を大切に幸福に生きたいとねがった女性たちです。

それが、どのように女性たちは地獄へ突き落とされ、その後生きてきたのか。

戦争犯罪は、普通の市民を暴力、強奪、殺戮の加害者と被害者に仕立てあげて、お互いを憎しみのなかにたたき落とす最悪の行為です。

私は前回、そして今回とこの場所を組合の仲間と訪れていますが、果たしてたったひとりで私はこの場所に身を置くことができるだろうか、と思うのです。

では、この場所にあるのは、人間は最低、最悪の存在であるという「絶望」だけなののでしょうか？そうではないのです。この事実を告発し、二度とこんなことをくり返してはいけないと立ち上がった女性たち。それに寄り添い世界中にこの事実を知らせ、その犯罪の責任を明確に(2000年の女性国際戦犯法廷における断罪)した賢人たち、そして豊かな感性で事実を学び、平和をつくりだす人へと変化していく若い学生たちの資料。ここは、そうした人間の真の勇気を学ぶことができる場所でもあるのです。

「アクティブミュージアム 女たちの戦争と平和資料館(WAM)」は、重い足をひきずってでも、誰もが訪れなくてはならない場所です。

多くの涙を流しながら学び、そして平和のために真に「アクティブ=行動する」人へと私たちを変える場所なのです。